

児童朝会 校長の話 10月30日

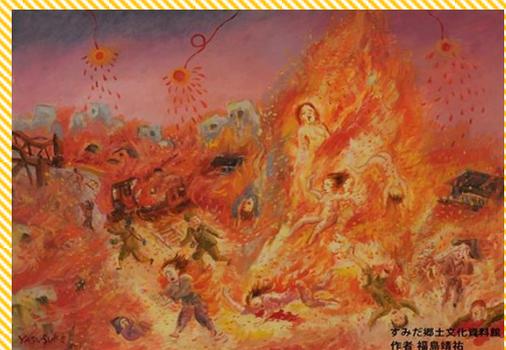
前回の児童朝会で、昭和の初めに、どんな大きな地震や火事にも耐えうる鉄筋コンクリート3階建ての復興校舎が作られたことを話しました。そして、昭和20年の東京大空襲で東京の下町が火の海になってしまったときにも、浅草小学校の校舎は燃えずに残ったと言うことを話しました。燃えなかったのは、校舎が頑丈だったこともありましたが、それだけではなく、命がけで校舎が燃えないように守った人たちがいました。そのことを話します。

昭和20年3月、アメリカの戦闘機 B29 が東京の上空に飛んできて、焼夷弾を次々に落としました。それによって東京中が燃えてしまいました。その時、浅草小学校には5人の先生や主事さんがいました。その後3人の先生が駆けつけて8人に



になりました。春日部環教頭先生が中心になって、集まった避難者にも指示を出して、先生たちや町の人たちで力を合わせて校舎を守り抜きました。その様子が140周年の記念誌に載っていますので、紹介します。

予想したとおり、避難者がどんどん駆け込んできました。その際、防空頭巾やその他を点検して、備え付けの水槽で手落ち無く火を消して校舎に入れるようにした。講堂から校舎を点検して回ると、校舎の窓から眺めた周辺は、おそらく三分の二位は燃えていて辺りは火の海といった方が当たっている状況だった。人間が吹き飛ばす程の風が吹き、風のうなる音、燃える音、人の悲鳴が聞こえていた。



学校に辿り着いた避難者は若者が多かったが、魂の抜けた人形の様だった。涙を流している若者もあった。私は彼ら一人一人の肩を叩き大声で怒鳴って、火叩、砂、水桶の位置を教えて火の粉一つも校舎に入れないように頼んで歩いた。（中略） 戦闘機の下からササー、ササーと音がして焼夷弾が落ちるのが花火のように見えた。その一つが講堂の近くに落ちたように思えた。私は講堂の方に駆け寄って行ってみた。火の付いたものが講堂の隙間からのぞいたカーテンの裾に燃え移った。私は「石原君！」と主事を呼びながら講堂の内部に駆け入った。石原君も後から続けて飛び込んできた。二人で力を合わせてコンクリートの壁からカーテンを引き抜くと、案外たやすくどさりとカーテンは床の上に落ちた。燃えている部分は幸い小部分だったので二人で踏みつけるとまもなく火は消えた。私たちの靴に貼り着いた火はどうしても消えない。講堂の後ろ側に砂場があるのでそこまで走って砂の中に靴をねじりながら火を消し止めた。（中略） 火の勢いが激しいので炎の先が窓ガラスに当たり、ピンピンという音と共にガラスにひびが入り始めた。建物はコンクリートだが内部の木の部分や机や椅子が燃えだしたら大変なことになると思った。その時私たちは校庭に置かれてあった小型ポンプに気が付いた。水を吸い込む管をプールに突っ込んで石原君はポンプの運転台に乗ってエンジンをかけてみた。私はホースをつないで3階まで引っ張った。本当に幸いだった。ポンプはバタバタ音を立てて動き、水がホースを膨らませて出始めた。3階から床の上を一面水浸しにした。2階も階段を伝って1階まで一杯に水が流れた。私は「しめた！」と思った。そのうちに西側の火の勢いが下火になったし南側も大部分の家が焼け落ちた。もう学校に燃え移る心配がなくなった。



こうして浅草小学校は燃えずに残りました。浅草小学校に避難してきた人は2万5千人いたそうです。たくさんの人を守ることができました。それには夜を徹して命がけで学校を守った人たちがいたのです。浅草小学校の近隣の富士小、金竜小、千束小、田原小は燃えてしまったのでその後、5校の子供たちが浅草小学校の校舎で授業を再開しました。こうして、浅草小学校の150年の歴史がつながってきました。素晴らしい歴史ですね。

150周年の式典まで後3週間です。今日は式典の練習を全校で行います。みんなで力を合わせて、式典を成功させ、浅草小学校の150年をお祝いしましょう。